



前衛社發行所 前衛社發行所
前衛社發行所 前衛社發行所
前衛社發行所 前衛社發行所
前衛社發行所 前衛社發行所

露國の飢饉

露國の飢饉地方の慘狀は、言語に絶して居る。ナンセン救濟團を組織して、露國飢民の救濟に盡して居るナンセン博士の報告によると、サラトフ縣の農民は、文字通りに秋の暮に集めて置いた麥粟と水とで、辛くもその生命をつないで居る。彼等は麥粟を碎いて、それに豚の皮や粘土や家畜の屍骸から採つた骨屑とを混せて、これを唯一の營養物として食して居る。多くの百姓の家へ行くと、屍骸が何日も埋めずにそのまゝになつて居る。大抵の家では、家族をあびて、飢死を待ちつゝ床に横臥つて居る。

サマラ縣も同様の慘狀を呈して居る。どの村へ行つて見ても埋葬せずにそのまゝにしてある小兒の屍骸は、飢えた野犬の咬小に任せてある。同じく飢饉の救濟に働いてる露國の飢饉地方の慘狀は、言語に絶して居る。ナンセン救濟團を組織して、露國飢民の救濟に盡して居るナンセン博士の報告によると、サラトフ縣の農民は、文字通りに秋の暮に集めて置いた麥粟と水とで、辛くもその生命をつないで居る。彼等は麥粟を碎いて、それに豚の皮や粘土や家畜の屍骸から採つた骨屑とを混せて、これを唯一の營養物として食して居る。多くの百姓の家へ行くと、屍骸が何日も埋めずにそのまゝになつて居る。大抵の家では、家族をあびて、飢死を待ちつゝ床に横臥つて居る。

コレケリル氏の報告によると、「人々は文字通りに、畑のように死んで居る。彼の見た人口四百の村落では、一日に八百人から十人づつ死んで、人口九千の村落では、一日に五十人の割合で死んで居る。」露國は由來飢饉を以て有名である。之は大陸的な特殊の天候によるものであるが、耕作法が幼稚な爲に、其災害は一層甚しくされて居る。即ち灌溉の設備がなく、地面が深く耕やされて居らぬので土壌に多くの水分が保たれて居らぬ爲め、數ヶ月の旱天が続いた上に一度熱風が吹きまくると、作物は文字通りに燻き盡されるのである。

殊に戦争中から農具は損じ家畜は減つて居り、その上交通機關は荒廢して居るが、列國の經濟封鎖の爲に恢復の道がなく、外國の軍資と彈藥によつて後援された反革命軍の爲に、重要な鐵橋や鐵道は無殘に破壊された。

まゝになつて居る。そこで飢饉も困難となつたのである。帝政時代にも屢々大飢饉があつたが、飢饉の慘狀は外界に洩れぬやう、努めて秘密にされて居た。そして穀物は悉く大地主によつて、外國に輸出されて居る。

◆主筆 山川均・山内菊栄
◆社論主筆 及川啓太郎
◆理論と實際とを研究する
◆専門雜誌(毎月一日發行)
◆前三十號、一年三冊計
◆發行所、社會主義研究所
◆東京市外、大森入新井町
◆振替東京、三四一九一番
てゐたのである。

ところが労働政府と全露労働組合では、組織者の三分の一を動員して必死に救済に盡して居る。また飢饉の報が一度び傳はると、四百萬の赤軍兵卒は一齊に一日分のパンの支給を割いて飢饉地方に送つたそうである。

「前衛」の讀者諸君に
七月號は都合により七月中旬に發行いたします

〔前衛號外〕 大正十一年七月二十八日第三種郵便物認可
日印印刷總本發行

〔定價貳錢〕 東京大森町新井前衛社發行
〔發售東京五圓七毛〕

寄附金額報告(一)	
金一十二元	金三十二元
金五元	金十元
金三元	金八元
金一元	金五元
金五角	金二元
金二角	金一元
金一角	金五角
金五錢	金二角
金二錢	金一角
金一錢	金五錢
金半錢	金三錢
金一分	金五分

姓名: 鈴木 野矢 田村 加藤 小林 山田 佐藤 高橋 渡辺 中野 森田 佐野 山崎 池田 山口 石川 藤田 松本 鈴木 野矢 田村 加藤 小林 山田 佐藤 高橋 渡辺 中野 森田 佐野 山崎 池田 山口 石川 藤田 松本 鈴木 野矢 田村 加藤 小林 山田 佐藤 高橋 渡辺 中野 森田 佐野 山崎 池田 山口 石川 藤田 松本

社會主義「前衛」(毎月一日發行定価五圓七毛) 本誌は徹底的に無産階級の機關誌として編輯し批評し解剖し糾弾するに起る無産階級の機關誌